



大観覧車とキバナコスモス (江戸川区葛西臨海公園) ㊦ レイコ

平成 28 年 №58

秋ひがん号

あきばさん

秋葉山 新井寺 発行
 市川市新井 1 の 9 の 1
 電話 047-357-8319
 FAX 047-357-8399
 mail: info@shinseiji.jp

秋ひがんとオリンピック

当山住持

「暑さ寒さも彼岸まで」の平穏な時節、秋彼岸のおとずれです。

秋彼岸に先立ち、先月は四年に一度のオリンピック、第三十一回夏季大会が南米ブラジルのリオデジャネイロで世界的に開催され、感動のうちに大円成しました。オリンピックは、申し上げるまでもなく、さまざまなスポーツ競技を通じて、切磋琢磨し、全人類の世界平和を願うこの上なく大きな祭典です。仏教の大きな眼目である平和な世界に到る「彼岸」の世界と相通じるところを感じます。皆様もご承知の通り、四年後にはこの世界平和を願うスポーツの祭典「オリンピック」が、日本・東京で開催されます。東京大会に向けては、さまざまな思いをこめて、世界平和を念頭に、スポーツのみならず、経済・文化・日常生活などの活性化、向上が期待されます。



曹洞宗テレホン法話

週替わりで法話を聞く
 ことができます

0120-508-740

「ていねい」を積み重ねる

10/11 ~ 17 は

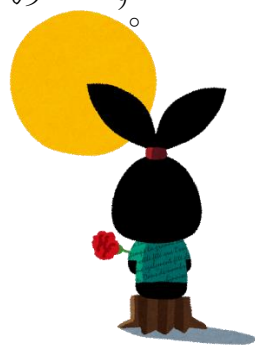
当山の副住職の法話です

今回のオリンピックでは、日本人選手の活躍はめざましく、史上最多となる、金(十二個)・銀(八個)・銅(二十一個)、四十一個のメダルを獲得し、世界第六位となりました。競技を終えた選手たちは、それぞれに感動と感謝に加え、身心共に長く苦しかったトレーニングを思い浮かべるような喜怒哀楽の様子でした。そして、さらなる修業、トレーニングを重ね、四年後の東京大会への出場を強く念願していました。日本オリンピック委員会には、「金メダル数世界第三位」を次期大会の目標にしているといい、さらなる大飛躍が期待されることです。私共も皆で、精いっぱい応援いたしましょう。

日々の日常生活にあつては、平和な彼岸の世界を願い、布施・持戒・忍辱・精進・禅定・智慧、「六波羅蜜」の実践修行に精進してまいりましょう。合掌

先代住職をしのんで

明年六月九日は、先代住職の二十三回忌を迎えます。先代住職をご存知の方も少なくなりました。本号では、先代住職にご縁の深い方の先代住職との思い出の言葉を回顧し、先代住職をご存知の方も、そうでない方も、ご一緒に先代住職を偲びたいと思います。



● 回想

松井 満

先代住職の実兄

父、佐蔵(明治九年生まれ)が、満鉄(南満州鉄道)関連の仕事に携わっていたため、私と弟、憲孝(幼名 憲治)老師は、満州で生まれた。弟は、大正二年三月二十三日誕生で、私より四つ年下の、いつも母親の傍らにいる、おとなしくてやさしい子供だった。外で泣かされて帰ってくると、ガキ大将の私が、「よくも弟をいじめたな」と仕返しにいつて、母に、いやと言うほどお灸をすえられた。父が長期の仕事に出て不在の折は、母子三人 留守を守り暮らした。父の仕事の羽振りの良いときは、食卓に料理上手な母の手料理が所狭しと並ぶ暮らしぶりであったが、収入が滞り明日の米も買えなくなると、湯を張った鍋に豆腐をいれた、名ばかりの湯豆腐を家族で囲む日々が続いた。

の若さであった。当日朝まで母子三人、ペーチカの傍らで布団にくるまって寝ていた。登校してほどなく、近くの知り合のおばさんが知らせてくれて、母の死を知った。風来坊の父に、遙か満州までついてきて、さんざん苦勞をし、いたいな子供二人を残し、異国の霧と消えた母の気持ちは、いかばかりであったことか。その後、兄弟は母の故郷の碓井(うすい)に(母方の近い血縁は、ほとんど途絶えていたが)引き取られたが、高階隴仙禅師(たかしなろうせんぜんじ・大本山永平寺七十一世)と亡き母ミツが同郷の幼なじみであった縁で、弟は永泉寺にて養育していただくことになる。以後、一生を仏の道に生きていくご縁がここに定まったのである。母を亡くし、満州の安東に一人残った父も、昭和四年八月十八日に病死し、私たち兄弟は、自立の道を各々歩いていかねばならない運命を背負ったわけである。嘉穂中学(後の福岡県立嘉穂高校)、駒澤大学仏教学科と進み、その後、「終生の師」ともいえる高階隴仙禅師の元で、薫陶を



満さん(左)と先代住職
於、新井寺本堂前

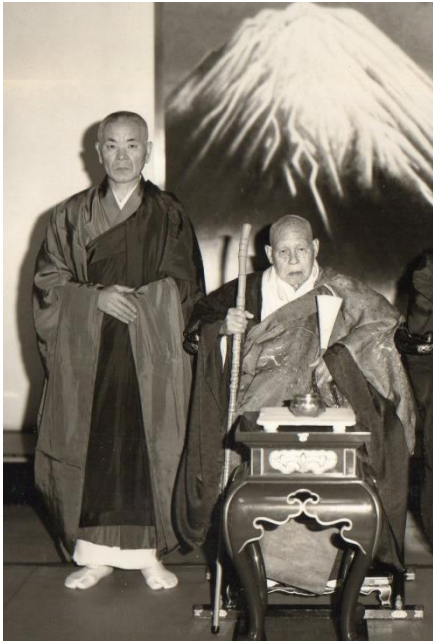
受けることとなる。心から敬愛する師に、ごく身近でお仕えさせていただいたことは、まさに人生最良の時間であったことだろう。

禅師の随行で留守の多かった憲孝老師に代わり、当時の荒れ寺を護り、三人の子供を見事に育てあげたのが、妻 光枝さんである。天性の明るさと社交性で、檀家の人々と交流を深め、内助の功を遺憾なく発揮した。憲孝老師の功績はいうまでもないが、彼女の偉大なる貢献なくしては今日の新井寺の姿は語れない。私たち兄弟はそれぞれ千葉と博多に住み、時折 往き来したが、世の更けるのも忘れ四方山話に花を咲かせた。晩年、寺を道孝和尚に託し、老夫婦二人の生活を送るようになった。体調を崩し入院することになったが、家族全員の手厚い看護のもと、快癒し、愁眉を開いた。しばらくして、上京の機会を心待ちにしていける電話があった。それが、兄弟最後の会話となった。「おれより先に死ぬなよ」、「うん、

わかつとる」という、いつもの挨拶代わりのやりとりを残して。突然の逝去であった。年長の私より先に逝くとは、痛恨の極みである。

弟は、沈黙考の人であった。一人静かによく書物を読んだ。自分に厳しく、人には誠実、寛大な心で接した。親を早くに亡くし、兄弟離ればなれの辛さ、悲しさに耐えて、人の情けの中で生きてきた。私たち兄弟は、生涯を通じてお互いを思いやり、一度も仲違いすることなく過ごしてきた。憲孝老師が大切にしてきた家族、子、孫たちもそれぞれの道で着実な歩みが続けていくことと思うが、父の遺徳を忘れることなく、「協調、誠実、寛大な心」を継承してくれるよう、切に願っている。それを見届けることが、先立った弟へ、私のなによりの手向けになることであろう。

(平成十六年十月八日 九十三歳で逝去)



高階禅師様と先代住職 於、可睡齋「瑞龍閣」

● 可睡齋専門僧堂安居時代

松井憲孝師にお仕えして

松井素準

今から五十余年前の話ですが、小僧時代、私にとって筆舌に尽くしがたいほどの大恩のある老師様に数々の薫陶(くんとう)を受けたことは、今なお、私の脳裏から消え去ることはできません。

昭和二十九年 春まだ浅い三月、可睡齋韋駄天(いだてん)前にて、緊張のあまり震える手で木版三打。且過寮(たんがりょう)を経て入堂の拜を終えると、いきなり「知客和尚行者(しかおしょうあんじゃ・知客和尚様を補佐しお仕えするお役)接客補」に配役されました。右も左もわからない私に、大柄の総知客(そうしか)お寺の受付・接客責任者)老師は「可睡へよく来たな。私も松井。君も松井。『大松と小松』だなあ」と笑って対面しました。これが、松井憲孝老師との出会い、一生お世話になるご縁のはじまりでした。親族でも法類でもない私に、同姓だけのご縁で今もなお、後輩の二十九世様(現在の方丈様のこと)とのご縁も続いていただいております。

総知客老師は、ときには峻厳(しゅんげん)、ときには優しく、人に対する「目配り」・「気配り」・「心配り」ができ、相手の心を読み取ることができる超一流

の老師でした。いま、私が察するに、秋葉總本殿 可睡齋 総知客として、接待の基本を私たちに教えてくださったのでありましょう。

また、当時は大戦後で「衣食住」全てが不足していた時代でした。可睡齋も大伽藍復興の真っ最中で、再任のお師匠様高階禅師様を常に「敬慕」され、寝食を忘れて補佐される御姿、特に「火まつり大祭」の深夜七十五膳献供の「御札書き」、早晨(そうしん・朝いちばん)祈禱(いた)に間に合わせるため、徹夜で作務をなされた御姿は、小僧ながら頭の下がる思いでした。また一方では、細やかな心配りで、雲衲衆の疲労度を見計らい、作務終了後、開枕(かいちん・就寝)間際に「今夜は豆腐講をやる。『小松和尚』、用意しなさい」と指示を受け、用意するほうも楽しかったよいい思い出のひとつです。さらにまた、私の家庭事情なども考慮されてか、「これからの僧侶は、学問もしなければならぬ」と短期でもよいから大学へ行きなさい」と指示をしてくださいました。高階禅師様や当時の副寺(ふうす) 佐瀬淳光老師がたにご進言くださり、一応、駒澤大学の門をくぐらせていただいていたことには、生涯忘れることのできない思いであります。

合掌

(元 可睡齋専門僧堂副寺 平成二十三年秋遷化)

おはなの おはなし かさい「キバナコスモス」



キバナコスモス
葛西臨海公園

今年の「おはなのおはなし」は、おすすめの花畑について書いています。春のチューリップ畑、夏のひまわり畑に続き、秋はコスモス畑を紹介します。

コスモスというと、ピンク系の可憐な花をイメージする方が多いかと思いますが、コスモスにはオレンジ色のもものもありません。「キバナコスモス」という品種です。キバナコスモスは、メキシコ原産のキク科コスモス属の一年草の花で、日本には大正時代頃、入ってきたとされています。

キバナコスモスのお花畑は、「葛西臨海公園」(江戸川区)にあります。花屋秋葉山が仕入れをしている葛西市場のすぐそばです。葛西臨海公園には大観覧車もあり、観覧車から眺めるコスモス畑は絶景です。大観覧車を背景に撮った写真は、まるで絵はがきのようにです。見頃は、九月中旬から十月中旬。コスモス畑は、

無料で楽しむことができます。お出かけの際は、カメラも忘れずに。コスモス畑のそばには、ひがん花もあり、十七日にはつぼみが多かったので、きつと今頃は見頃を迎えているかと思えます。台風の影響が心配ではありますが・・・。

思わぬところでみかける花は、雑草であっても、名前が知らない花であっても、わたしたちをおだやかな気持ちにしてくれていることがあります。気づかないことも多いかもしれませんが、わたしたちの生活にはいつも花がそばにあるはず。花から感じるしあわせをもっと感じたいとき、ぜひお花畑に行ってみてください。全国にはたくさんのお花畑があります。一輪の優しい花は、たくさんあつまると大きな力となって、元気をくれることでしょう。

(花屋 秋葉山 店主しるす)

- 葛西臨海公園
- 京葉線「葛西臨海公園」下車徒歩一分
- 都バス・東西線「西葛西」・「葛西」から「葛西臨海公園行き」約二十分
- 車・首都高速湾岸線「葛西IC」すぐ

● お墓参りのお花は常時ご用意しております(一対千六百円)。ご希望の方は、お気軽に、おてらの玄関にお越しください。

● 一対千六百円のお墓参りのお花以外は、完全予約制オーダーメイドでおつくりします。配送・配達も行なっています。

編集後記

寺に生まれた人間は、地域にお返しをする責任がある

大阪府 應典院 秋田光彦

「どうして和尚さんになつたのですか」と尋ねられることがよくあります。たいていは、「おてらに生まれたからです」と答えています。誰かに頼まれたわけでも、勧められたわけでもない。特別な理由もない。縁にしたがつてたどりついた道だということです。けれども、それが適切な答えなのだろうかと考えていました。ときどき「亡くなった母は、副住職さんのことを気にかけていたんですよ」と言われることがあります。はじめは、思いもよらない言葉に「ありがとうございます」と言いますが、最近、この言葉が和尚になった理由を教えてください。さつていられるような気がしています。あらゆるご縁のおかげでいまの自分がある。そのはかりしれないご縁へのご恩返し、「おてらの子どものご恩返し」が、わたしが決めた道なわけではありません。万分の一のご恩返しもできませんが、あらゆるご縁への感謝の気持ちをお返ししたいと思います。時節がら、ご自愛くださいませ。

編集 小子合掌

